

— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra”!

(みんなで“法華経観”を見つける旅に出よう)

『妙法蓮華経 妙音菩薩品第二十四』 (本門・流通分)

○『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん者

には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)

○『其の習學せざる者は 此れを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)

○「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)

○『十分の一でも実践できれば、また一つでも徹することができれば、立派な精進』



<妙音菩薩品のあらすじ>

【釈尊の眉間から光が放たれ、浄光莊嚴国(理想の世界)が照らし出される】—

【三〇八頁 一行】釈迦牟尼世尊が薬王菩薩の過去世(『薬王菩薩本事品』)について語り終えられると、突然、世尊の眉間から光明が放たれ、東方(過去の世界/西方は未来)にある無数の世界・国土を照らし出しました。その国のなかに浄光莊嚴(じょうこうしょうこん)という国があり、浄華宿王智(じょうけしゆくおうち)如来がおられました。その国には無量無辺という無数の菩薩がおり、菩薩たちは仏さまを取り囲んで恭敬(くぎょう/うやうやしく敬う)、讚歎(さんたん)し、浄華宿王智如来が菩薩のために教えを説いている場面が、まざまざと照らし出されたのでありました。

【三〇八頁 六行】そこに一人の菩薩がいました。名を妙音と言います。この妙音菩薩は/『衆(もろもろ)の徳本(とくほん)を植えて』大変長い期間、善行を行い続け、しかも無量百千万億という無数の仏にお仕えたのでありました。その結果、妙音菩薩は非常に深い智慧を得ることができ、法華経があらゆる教えの中心であるということを確認し、その確信が揺(ゆ)るかない境地・妙幢相三昧(みょうどうそうざんまい)や、法華経を信じ、実践することによって得られる心が散乱しない絶対安穩の境地・法華三昧(ほっけざんまい)をはじめとする数々の三昧の境地を得ることができたのでした。そして釈迦牟尼仏が発した光は、この妙音菩薩の全身を照らし出したのでした。

【浄光莊嚴国(理想の世界)での、浄華宿王智仏と妙音菩薩とのやりとり】——

【三四頁 三行】すると、妙音菩薩は浄華宿王智仏に次のように申し上げました。

『我當(われまぎ)に娑婆世界に往詣(おうげい)して、釋迦牟尼佛を禮拜(らいはい)し親近(しんこん)し供養し』
「世尊よ。私はこれから娑婆(しゃば)世界に赴(おもむ)き、釈迦牟尼仏を礼拝・供養したいと存じます。そして、釈尊のそばにいる文殊菩薩や藥王菩薩、勇施(ゆうせ)菩薩をはじめとする菩薩がたにもお会いしたいと思います」

【浄華宿王智仏の諭(さと)し。「娑婆世界を軽んじてはいけない】——

【三四頁 三行】その言葉を聞いた浄華宿王智仏は、妙音菩薩に仰せになりました。

「それは善いことです。どうぞ娑婆世界へ行ってきなさい。しかし妙音菩薩よ。気を付けなければならないことがあります。／『汝彼(なんじか)の國を輕(かろ)しめて下劣(げれつ)の想(おもい)を生ずることなかれ』それは、娑婆世界へ行って、その國を輕蔑(けいべつ)するような心を起こしてはならないということです。なぜならば善男子よ。そなたが行く娑婆世界という國は、土地自体が大変な高低があり凸凹(でこぼこ)して平坦ではありません。私のこの國は大地が宝石できて美しいのですが、娑婆國土は大地が土できており、石がゴロゴロしていて、険(けわ)しい山々が連なり、しかも汚染されている不浄なものが充満しています。それゆえどうしても娑婆國土が『劣(おと)った國』に見えてしまいます。そして、その國の仏の大きさは大変小さく、同様に菩薩たちも小さい体です。それに対してそなたの体は四万二千由旬(よじゆん)という大変大きく、私の身も六百八十万由旬(よじゆん)という大きさです。しかもそなたの身は端正(たんせい)で美しく、百千万の福德に満たされ、全身から素晴らしい光明を発しています。しかしかの國では、仏や菩薩の姿はそのように大きくはなく、その國にいる小さな仏や菩薩たちを見下げる心が生じてしまうかも知れません。しかし、それは大変な心得ちがいです。ですから、そうならないように、気をつけなければなりません」

【妙音菩薩が浄華宿王智仏へ感謝。「すべては如来のおかげ」】

【不浄の娑婆世界が、なんと、金銀に輝く】——

【三四頁 終行】すると妙音菩薩は浄華宿王智仏に申し上げました。

「はい、仰(おお)せの通りにします。しかし、私が娑婆(しゃば)世界へ行くことができることそれ自体が、これは他でもありません。／『皆是(みなこ)れ如来の力・如来の神通遊戯(じんづう ゆげ)・如来の功德智慧莊嚴(しょうこん)ならん』すべては如来のお力によるものです。すべては如来が持つ自由自在の神通力のおかげであり、如来の偉大なるお徳と最高の智慧によるものであります」と、**①**浄華宿王智仏へ感謝(大本への感謝)を申し上げたのでした。

【三五〇頁 一行】『身(み)動搖せずして三昧(さんまい)に入り、～耆闍崛山(ぎしゃくせん)～八萬四千の衆寶(しゅうぼう)の蓮華を化作(けき)せり』そう言うと妙音菩薩は、その感謝の念を深めるために、そのまま身を動かさずに(心を定めて)**②**『禪定』の境地に入りました。すると妙音菩薩はその三昧の力によって、**③**娑婆世界の耆闍崛山(ぎしゃくせん・靈鷲山(りょうじゅうせん))の法座の周圍一帯に八萬四千におよぶ宝石の『蓮華』が忽然(こつぜん)と現われたのでした。『蓮華』は金の莖や銀の葉、そして花の雄

(お)しべと雌(め)しべはダイヤモンドででき、花びらは真っ赤なルビーで美しく輝いています。

【娑婆世界が金銀に輝く理由について、文殊菩薩が釈尊に問う】——

【三五〇頁 五行】突然現れたこの美しいありさまを見た文殊菩薩は、不可思議な思いと感嘆(かたん)の思いが募(つ)り、釈尊にお尋ねしたのでした。

「世尊よ。なぜこのような美しい『蓮華』が何千万も現われたのでしょうか。この奇瑞(きずい)が起きた理由は、一体何なのでございましょうか」

【文殊菩薩の問い・娑婆世界が金銀に輝いた理由を、釈尊が答える】——

【三五〇頁 七行】すると釈迦牟尼仏は、文殊菩薩にお答えになられました

「文殊よ。はるか東方(過去の世界)に浄華宿王智(じょうけしゅくおうち)如来がおられる浄光莊嚴(じょうこうしょうごん)という国に妙音菩薩という大菩薩がいます。この妙音菩薩が私を供養することを願い、無数の菩薩と共にこの娑婆世界に参り、法華経を聴聞しようと願い、かつ、深い感謝の念を定めたために、このような不可思議な瑞相(ずいそう)が現われたのです」。

【文殊菩薩が妙音菩薩にお会いしたいことを、釈尊に願う】——

【三五〇頁 終二行】文殊菩薩はさらにお尋ねしました。「世尊。その妙音菩薩という方は、どのような善行をなしたために、このような奇瑞(きずい)を起こす大神力を具えられたのでしょうか？そして素晴らしい三昧の境地に達せられたのは何故なのでしょう？世尊よ。私もそのような三昧に至る修行をさせて頂きたいと思しますので、その大菩薩が娑婆世界にお越しになるならば、／『神通力を以て、彼(か)の菩薩の來(きた)らんを我をして見ることを得せしめたまえ』どうぞ世尊の大神力で、その大菩薩に会わせて下さい」とお願いをしたのでした。

【文殊菩薩の願いに釈尊が応える】——

【三五〇頁 四行】それを聞いた釈迦牟尼仏は、文殊菩薩にお答えになりました。

「文殊よ。遠い遠い過去世において仏となられた多宝如来が、あなた方の為に妙音菩薩の姿を現わしてくれるでありますよ」

【釈尊の命を受けて、多宝如来が妙音菩薩に手配】——

【三五〇頁 五行】すると多宝如来が、はるか遠くの浄光莊嚴(じょうこうしょうごん)という国にいる妙音菩薩に向かって言いました。

『善男子來(きた)れ、文殊師利法王子女(なんじ)が身を見んと欲す』「善男子よ。娑婆世界にいつて来なさい。文殊菩薩があなたに会いたがっていますよ」とお呼びになりました。

【妙音菩薩が娑婆世界にやって来る。そして、釈尊と多宝仏に挨拶】——

【三五〇頁 七行】そのお声に應じて妙音菩薩は浄光莊嚴国から姿を消し、八万四千の菩薩たちを引き連れて娑婆(しゃば)世界にやって来ました。しかも娑婆世界に来るまでに通過したすべての

国々では、大地が六種に振動し、空から七宝(しっぽう)の蓮華が雨のように降り注がれました。そして、百千の天界の楽器がひとりで美しい音楽の調(しら)べを奏(かな)でたのでした。妙音菩薩の姿はとても美しく、瞳は青蓮華(しょうれんげ)のように輝いています。端正(たんせい)なお顔とお姿は、百千万の月を合わせても遠く及ばない美しい光を放っています。お体は金色に光り、無量百千の功德によって全身が美しく輝いています。／(『威徳熾盛(いとくしじょう)にして光明照曜(こうみょうしょうよう)し、諸相具足(しよそうぐそく)して』)そして誰もが尊敬の念を起さずにはおれない偉大な徳分が体全体を覆(おお)い、それが光明となって全身から発せられています。しかも仏の三十二相と同様にあらゆる徳相を具え、天上界の力士である那羅延天(ならえんてん)のように力強くたくましい体格をしています。

【三五頁 終行】そして**妙音菩薩**は、七宝(しっぽう)で作られた楼閣(ろうかく)に入室し、虚空へと飛んで行きました。多くの菩薩たちがその楼閣を恭(うやうや)しく取り囲み、七多羅樹(しちたらじゆ)という高さを飛び続け、娑婆世界の耆闍崛山(ぎしゃくせん・靈鷲山(りょうじゅうせん))に到着しました。到着すると妙音菩薩はその七宝の楼閣(ろうかく)から出て来て、数百千の金の価値がある首飾りを釈尊に捧げ、釈尊の御(み)足に額を付けて礼拝し、ご挨拶を申し上げたのでした。

【三五頁 三行】「世尊よ。浄華宿王智如来からのご挨拶をお伝え申し上げます」

(『少病少惱(しょうびょうしょうのう)起居經利(きこきょうり)にして安樂に行じたもうや不(いな)や。四大調和(じようわ)なりや不(いな)や』)「ご病気なされず、お体はお健やかでしょうか。／(『世事(せじ)は忍びつべしや不(いな)や』)この娑婆(しゃば)世界の様々な出来事に、お心をお煩(わすら)わせではないでしょうか。／(『衆生は度し易(やす)しや不(いな)や』)衆生は世尊の教化に素直に従い、世尊の手を煩(わすら)わせてはいないでしょうか。衆生の心に貪・瞋・痴(とん・じん・ち)や人を妬(ねた)み、物惜(ものお)しみをし、憍慢(きょうまん)な心がはびこってはいないでしょうか。／(『父母(ぶ)もに孝せず～邪見不善(じゃけんふぜん)の心にして五情(ごじょう)を攝(おさ)めざることなしや不(いな)や』)衆生は親孝行をせず、僧を敬わず、誤った思想に振り回され、邪悪な思いにかられ、自分の五官の欲望に溺(おま)れてはいないでしょうか。／(『衆生は能(よ)く諸(もろもろ)の魔怨(まおん)を降伏(ごうぶく)するや不(いな)や』)世尊よ。衆生は自分の中にある悪の心に打ち勝っているでしょうか。そして、世尊が法華経をお説きになられて、多宝如来さまがその証明役としてお姿をお現わしになられたでしょうか」と、釈尊に浄華宿王智如来のご挨拶をお伝えしました。

【三五頁 終四行】すると、**妙音菩薩**は釈尊に続いて、**多宝如来**に対してご挨拶申し上げました。

(『又(また)多寶如来を問訊(もんじん)したもう、安穩少惱(あんおんしょうのう)にして堪忍(かんにん)し久住(くじゅう)したもうや不(いな)や』)「多宝如来よ、お健やかでありましたでしょうか。久しく宝塔の中におられますが、ご機謙はいかがでしょうか」

【**妙音菩薩が多宝如来の拜謁(はいえつ)を、釈尊に願う**】――

【三五頁 終三行】こう申し上げた**妙音菩薩**は、あらためて**釈尊**に願い出ました。

「世尊よ。多宝如来は今、塔の中におられますが、そのお姿を拝みとう存じます。どうぞ世尊のお力でお目にかからせてください」

釈尊に〔三五二頁 終行〕すると釈尊は多宝如来に向かって言われました。

「多宝如来よ、妙音菩薩がお目にかかりたいと願っています。どうぞお会いになってください」
その言葉を受けて、多宝如来は妙音菩薩に語りかけられました。

〔三五三頁 一行〕『善哉(ぜんざい) 善哉、汝能(なんじよ)く①釋迦牟尼佛を供養し、及び②法華經を聴(き)き、并(ならび)に③文殊師利等を見んが爲の故(ゆえ)に此(ここ)に來至(らいし)せり』「よろしい。妙音菩薩よ。そなたは①釈尊を『供養する』ためによくぞ来られました。そして②『法華經を聞く』ために、また文殊菩薩をはじめとする③『仏弟子たちに会う』ためにこうして来られたのは、本当に立派なことです」と、妙音菩薩が三つの目的のために娑婆(しゃば)世界に来たことを讃えました。

【華徳(けとく)菩薩が妙音菩薩の徳分について、釈尊に伺う】——

〔三五三頁 二行〕すると、この法会(ほうえ)の場(ば)にいた華徳(けとく)菩薩が、釈尊にお尋ねしました。
「世尊よ。この妙音菩薩というお方は、これまで如何なる善行を積み、かつ、どのような徳分を具えたために、こうした神力を身に付けることができたのでしょうか」

【華徳菩薩の問いに釈尊が答える／妙音菩薩の徳分について】——

〔三五三頁 四行〕釈尊は華徳菩薩に答えられました。

「華徳菩薩よ。それは次のようなことがあったためです。はるか昔、雲雷音王仏(うんらいおんのうぶつ)がおられた時、時代は喜見(きけん)といい、現一切世間(げんいっさいせけん)という国に妙音菩薩がいました。この妙音菩薩は雲雷音王仏を供養するために十万種類の音楽を奏(かな)で、(にとば)を以て讚歎・供養し、(仏の教え)を広めたこと(の象徴) 八万四千におよぶ宝の器を捧げて、一万二千年の長きにわたって供養を続けたのでした。その大きな功德によって、現在、妙音菩薩は淨華宿王智(じょうけしゅくおうち)如来のもとに生まれることができ、あのような神力を得たのです」

〔三五三頁 終五行〕「華徳菩薩よ。あなたは どう思いますか。じつはその昔の妙音菩薩こそ、現在の妙音菩薩その人なのです。華徳菩薩よ。この妙音菩薩はこのようにずっと昔から無数の仏に仕え、供養し、長い間、徳の本(もと)となる『善行』を積み、その報いとして恒河沙(ごうがしゃ)百千万億那由他(なゆた)という無数の仏に会うことができたのです」

〔三五三頁 終行〕「華徳菩薩よ。 / (『汝但(なんじただ)妙音菩薩其(そ)の身此(みここ)に在(あ)りとのみ見る。而(しか)も是(こ)の菩薩は種種(しゅじゅ)の身を現じて、處處(しょしょ)に諸(もろもろ)の衆生の爲(ため)に是(こ)の經典を説く』) あなたはこの妙音菩薩という菩薩は、ここにいる菩薩ただ一人のように見ているのですが、そうではないのです。この菩薩は様々な身となってあらゆる所に現われ、衆生のために法華經を説いているのです」。

〔三五四頁 二行〕「妙音菩薩は、ある時は梵天王(ぼんでんのう)の身となって現われます。あるいは帝釈天(たいしゃくてん)の身となり、あるいは大自在天(だいじざいてん)や天大(てんたい)將軍、そして毘沙門天王(びしゃもんてんのう)の身となり、ある時は徳の高い大王、富豪、中堅階級、大臣、バラモンの身となって現われます。そればかりか、出家、在家の修行者の身となり、先ほどの富豪や大臣などの妻の身となり、そのほか男の子や女の子、あるいは天人・竜神・鬼神、そして人間や人間以外の生き物の身となって姿を現わして、この法華經を説き広めるのです」

【妙音菩薩は娑婆世界(現実の世界)を救う菩薩】——

【三五四頁 終四行】「この妙音菩薩は、／『諸有(しょう)の地獄・餓鬼・畜生及び諸(もろもろ)の難處(なんじょ)、皆能(よく)救済(くさい)す』地獄界や餓鬼界、畜生界をはじめとする苦難の世界であえてい
る者たちを救済する菩薩であります。つまり墮落(だらく)した言わば最低と思われるような人を、
妙音菩薩は蔑(さげす)んだり、見下したり、憎んだりすることなく、平等に救うのです」

【三五四頁 終三行】「この妙音菩薩は、例えば男子禁制の奥御殿(おくごてん)に行く必要があれば、女身
(にょしん)に身を変じて赴(おもむ)き、教を説くのです」

【三五四頁 終二行】「華徳菩薩よ。この妙音菩薩は娑婆(しゃば)世界のすべての衆生を救済し、守護す
る菩薩です。様々な姿に変化(へんげ)し、／『此(こ)の娑婆(しゃば)國土(こくど)に在(あ)って諸(もろもろ)の衆生(しゆじやう)の爲(ため)に
是(こ)の經典(きんげん)を説く。神通(しんつう)・變化(へんげ)・智慧(ちゐ)に於(お)て損減(そんげん)する所(ところ)なし』この娑婆世界の全ての
の衆生に対して教を説くのですが、妙音菩薩の神力は、決して損(そ)なわれたり、衰えるも
のではありません。つまり『理想』である教を『現実』の世界に説く時、ともすると、理想と現実
が一致せず、理想通りには行かなくなることがありますが、**努力を惜しんではならないのです。**
理想を夢に描くばかりで、理想を現実化する努力を怠(おこた)ってはなりません。妙音菩薩の神
力は、現実(じやうじつ)に敗れてしまってその神力が損(そ)なわれるようなものではないのです」

【三五五頁 二行】「妙音菩薩は、／『若干(そくぱく)の智慧(ちゐ)を以(も)て明(あきら)かに娑婆(しゃば)世界(せかい)を照(て)して、一切衆
生(しゆじやう)をして各(おのおの)所知(しよち)を得(え)せしむ』大いなる智慧をもって娑婆世界を照らし、一切衆生
が『人は如何に生きるべきかの道』を自ら知りうるように導くのです。そして、十方(じゅうぱう)の恒河沙(ごうがしゃ)
という無数の世界においても、娑婆世界と同様に導いています。もし声聞(しやうもん)や縁覺(えんかく)、菩薩
の身となって法を説くのがふさわしいと思われる者のためには、声聞・縁覺・菩薩の身となっ
て法を説きます。また仏の身となって法を説くのがふさわしいと思われる者のためには、仏の
姿を現わして法を説くのです」

【三五五頁 終五行】「妙音菩薩はこのように、／『種種(しゆじゆ)に度(た)すべき所(ところ)の者(もの)に隨(したが)って爲(ため)に形
を現(あらわ)す』教化(けふあ)すべき相手に応じて様々な姿となって現われるのです。／『乃(な)至(いた)り減(げん)度を以
て得(と)くべき者(もの)には減(げん)度を示(し)現(げん)す』もし、『死(し)』を以て教化(けふあ)するのが適切(てき)だと思わ
れる者のためには、『自(みづか)らの死(し)』を以て相手(あいて)を教化(けふあ)し、教(けふあ)の尊(そん)さを説(と)き示(し)します。華徳菩薩よ。
妙音菩薩は以上のような大神力(おほしんりき)と智慧(ちゐ)の力を具(たも)っている菩薩(ぼさつ)なのであります」

【妙音菩薩が得た『三味の境地』について、華徳菩薩が釈尊に問う】——

【三五五頁 終三行】その時、華徳(けとく)菩薩(ぼさつ)は釈尊(しやくそん)にお尋ねしました。

「世尊(よそん)よ。妙音菩薩(めうおんぼさつ)は深く善行(ぜんぎやう)を實踐(じやくぎ)されたために、現在(げんざい)のような徳(とく)を成就(じゆうじゆ)されたのだと存じ
ます。世尊(よそん)よ。妙音菩薩(めうおんぼさつ)はさらにその上にどのような『三味(さんまい)・さんまい』の境地(きんち)を身に付けられたた
めに、あらゆる身(み)となって一切衆生(いっせしゆじやう)を教化(けふあ)・救済(くさい)することができるようになったのでしょ
うか。その『三味(さんまい)』とは、一体(いつたい)どのような境地(きんち)なのでしょう」

【華徳菩薩の問いに釈尊が答える／妙音菩薩の『三味』について】——

【三五五頁 終行】すると仏(ぶつ)さまは、華徳菩薩(けとくぼさつ)に答(こた)えられました。

「善男子よ。それは（先の薬王菩薩が具えていたものと同じ）『現一切色身三昧（げんいっさいしきん ざんまい / 導く相手に応じて、自由自在に姿を変え、自由に法を説く力を具える境地）』という『三昧』の境地です。妙音菩薩はこの『三昧』を身につけていますので、以上のように無数の衆生を教化し、無量の利益（りやく）を与えることができるのです」

【三五六頁 二行】釈尊が以上のように妙音菩薩についての教えをお説きになりますと、妙音菩薩と共に浄光莊嚴（じょうこうしょうごん）という国からやって来た八万四千の菩薩たちと／（『此の娑婆世界の無量の菩薩、亦是（またこ）の三昧及び陀羅尼（だらに）を得たり』）娑婆世界にいる無数の菩薩たちは、みな一斉にこの同じ『現一切色身三昧』を身に付けることができたのでした。そしてあらゆる善を進め、悪をとどめる力を得ることができたのでした」

【妙音菩薩は本国（浄光莊嚴国）へ帰国。そして、浄華宿王智仏に報告】——

【三五六頁 四行】その時、妙音菩薩は釈迦牟尼仏、ならびに多宝仏塔を供養するという大切な目的を果たしましたので、本国の浄光莊嚴国へと帰って行きました。

そしてその帰路の途中にあるすべての国々は、感激のあまりに大地が六種に震動し、天空から美しい花々が降り注がれ、様々な音楽が奏でられ、妙音菩薩を讃えたのでした。

【三五六頁 六行】本国に帰った妙音菩薩は、八万四千という数多くの菩薩に取り囲まれながら浄華宿王智（じょうけしゅくおうち）仏のみもとに参って、次のように報告をしました。

「世尊よ。私は娑婆世界にまいり、衆生に豊かな利益（りやく）を与えました。そして釈迦牟尼仏にお会いできました。／（『及び多寶佛塔を見たとまつりて禮拜（らいはい）供養し』）また多宝仏塔を禮拜（らいはい）し、お二人の仏を供養・讃歎して参りました。そして文殊菩薩・薬王菩薩・得勤精進力（とくごんしょうじんりき）菩薩・勇施（ゆうせ）菩薩をはじめとする数多くの菩薩たちにも会うことができ、私と共に赴（おもむ）いた八万四千の菩薩全員が、一斉に『現一切色身三昧』という三昧の境地を得ることができるよう導いてきました。それは大変、有難いことでした」

【妙音菩薩品を聞いた無数の菩薩が、『無生法忍（むしょうぼうにん）』を得る】——

【三五六頁 終二行】以上の妙音菩薩の説話を世尊が説き終えられると、四万二千という数多くの菩薩たちは、『無生法忍・むしょうぼうにん／どんな現象の変化にも動ることのない境地』という境地を得ることができました。さらに／（『無生法忍（むしょうぼうにん）を得、華徳菩薩、法華三昧を得たり』）華徳（けとく）菩薩は、『法華三昧／法華経を深信し、身に行い、心身共に何事にも動かない境地』の境地に達することができたのでした。



「善行」をすること。「善行」をすることによって、その人の「徳」が育ちます。

- ※ 『薄徳 (はくとく) の人は善根 (ぜんこん) を種 (う) えず』 (二七六頁 一行 『如来寿量品』)
『諸 (もろもろ) の徳本 (とくほん) を植 (う) え』 (三八三頁 一行 『普賢菩薩勸発品』)
『衆善奉行 (しゅうぜんぶぎょう)』 (『七仏通戒偈』)

《息惛のひととき ①》

「徳本を植える」とは、「善行」をすることであり、「善行」することによって、『自分の徳分が育つのだと庭野開祖は示します。

— では、私は、自身の「徳分」を高めるために、「善行を行う」ことを、日頃、心かけていますか？（「徳」を植えて育てようとしていますか？） また、昨日、今日、どんな「善行」を行いましたか？（植えましたか？） 具体的に振り返ってみましょう。

※ 仏教は、一瞬、一瞬が勝負。刹那 (せつな) を疎 (おろそ) かにしない。

理想と現実との相違 / 下劣の想を生ずることなかれ (P449・終行/P341・5行)

「理想」というものは心の中に創 (つく) りあげた相 (すがた) で～ ところが、「現実」というものは理想にくらべると、はるかに小さい、低い、醜 (みにく) いすがたをしています。～ しかし、そうした現実の世界において、なおかつ高い人格を完成している人というものは、よしんばその姿形は小さくても、理想のすがたよりもずっとすくれているのです。

『若しは佛・菩薩及び国土に下劣の想を生ずることなかれ』 (三四九頁 終二行)

(娑婆世界) の仏・菩薩や国土に対して、見下げるような思いを生ずる恐れがありますが、それは大変な考え違いですから気を付けることです。

《息惛のひととき ②》

以上の経文では— 「理想」と比べて、目の前の「現実の世界」(現状)を見て、「嘆いて」みたり、「悔やんで」みたりして悲観し、何も努力をしようしなかったり、また、現状を相手の所為 (せい) にして、相手や周囲を責めたり、咎 (とが) めたり、蔑 (さげす) んだり、見下してはいけない。と説かれています。— では、そうしたこと(「理想」と比較して、「現実」の目の前の人を「見下し」「非難・とがめる」こと)が私にはないか？ または、現実を嘆き諦 (あきら) めたり、投げ出したりしてはいないか？ 振り返ってみましょう。

おおもと かんしゃ げんじつ か
大本に感謝すると現実を変えることができる

(P451・1行/P342・2行)

『**①**我今娑婆世界に詣らんこと、皆是れ如來の力・如來の神通遊戲・如來の功德
智慧莊嚴ならん。～ **②**身動揺せずして三昧に入り、～ **③**耆闍崛山～八萬四千の
衆寶の蓮華を化作せり』 (三四九頁 終行)

①「全ては如来のおかげです」と浄華宿王智仏への**大本への感謝**を申し上げ、

②そのことを**心に定める**『**禪定**』の境地に入る



③現実の世界である娑婆世界である靈鷲山(りょうじゅうせん)に金銀の『蓮華』を現わすことができる。**素晴らしい世界に変えて行くことができる。**

①「**大本への**」感謝をし、**②**そのことを**心に定める**と⇔、**③**取るに足りない、劣っていると見える「**現実の世界**」が**素晴らしい世界に変わって行く**というのです。「**大本への感謝**」が如何に大切であるかということです。

※ **①**と**②**を実践すれば⇔ **③**になる！(現実を変えることができる！)

《**急**惟のひととき **③**》

①「**大本への**」感謝をし、**②**そのことを**心に定める**と、⇔ **③**「**現実の世界**」を素晴らしい世界に変えて行くことができるというこの教えを、あなたはどのように受け止めますか？
かみ締めてみましょう。

『身は眞金の色にして、無量百千の功德莊嚴せり』 (三五頁 終三行)

(妙音菩薩の) 今まで積んできた計り知れない功德が、その身を美しく輝かせている。
徳の高い人、善行を積み重ねて来た人は、顔のどこかにそれが滲(にじ)み出ているものです。

『**①**釋迦牟尼佛を供養し、及び**②**法華經を聴き、并に**③**文殊師利等を見んが爲の故に
此に來至せり』 (三五三頁 一行)

①釈迦牟尼仏を供養し、**②**法華經を聞き、また**③**文殊菩薩をはじめとする菩薩や仏弟子たちに会うために来られたのは大變立派なことです(と多宝如来はおほめになりました)。

※この**①②③**三つを大切にすることは、見方を変えると「**仏法僧**」の『**三宝**歸依』と同意であると言えます。

ほとけ くよう おし き ぼさつ みなら
仏を供養し、教えを聞き、菩薩を見習う

(P477・1行/P363・5行)

これは大事なお言葉です。法華經をお説きになった釈迦牟尼仏のご恩に報いるために、①「**仏さまを供養し**」②「**法華經の教えを聞き**」、その教えを実践する菩薩たちに会って③「**菩薩を見習って手本にする**」。この三つを果たすために妙音菩薩が娑婆世界に来られたのを、妙法の証明者である多宝如来がおほめになっておられるのは、この三つが非常に大切なことを証明されたことにほかなりません。

理想国の大菩薩でさえそうですから、ましてや、われわれが常に①「**仏さまを供養し**」⇒(「**仏帰依**」) ②「**法華經の教えを聞き**」⇒(「**法帰依**」)、その教えを実践する菩薩たちを③「**見習って手本にする**」⇒(「**僧帰依**」)。そして実践することに努めなければならないのは、言うまでもありません。(「**三宝帰依**」が「**信仰姿勢**」として大切であるということは、言うまでもない)

《**患惟のひととき** ④》

「①「**仏を供養し**」、②「**法華經の教えを聞き**」、その教えを実践する菩薩たちに会って③「**菩薩を見習う**」。この三つが大切な「**信仰姿勢**」です。」と庭野開祖は示しています。

— この三つ(「**仏法僧**」の**三宝**)を大切するという「**信仰姿勢**」について、あなたは何か感じますか？ または、この「**三宝**」に今世、出会えたことを、あなたはどのように受け止めていますか？ ふり返ってみましょう。

※『是(こ)の諸(もろもろ)の罪(つみ)の衆生は 惡業の因縁を以て 阿僧祇劫(あそうぎこう)を過ぐれども 三寶(さんぼう)の名(な)を聞かず 諸(もろもろ)の有(あり)ゆる功德を修し 柔和質直(にゅうわしちじき)なる者は 則(すなわ)ち皆我(みなわ)が身 此(こ)に於て法を説くと見る』 (『如来寿量品』 二八頁 一行)

衆生は智慧がないために善い行ないができず、その結果、悪い行ないを積み重ねてしまい、そのために阿僧祇劫(あそうぎこう)という計り知れない年月を過ぎても、**仏・法・僧**の、『**三宝(さんぼう)**』の縁に触れることができず、その名さえ耳にすることができません。しかし、世のため人のためになる様々な善い行ないを實踐し、**柔和(にゅうわ)**な心で、正直で素直な心で精進している者は、すぐに**私を見る**ことができ、**仏が常に自分のそばにいて法を説いて**ることを自覚するのです。

『**萬二千歳に於て、十萬種の伎樂を以て雲雷音王佛に供養し、并に八萬四千の七**

寶の鉢を奉上す』 (三五三頁 六行)

さまざまな音楽をもって、雲雷音王仏を供養し、数多くの七宝の器を捧げました。

音楽を奏して仏さまのお徳を讃嘆することですが、しかし、ここでは音楽を奏し続けたという意味ではなく、**「ことば」をもって仏さまを讃嘆したことを象徴している**のです。

また**八万四千の「七宝の鉢(器)」を捧げた**ということは、これは「**八万四千の法門**」を意味し、**「仏さまの教えを多くの人に説く」**ことによって、**仏恩に報じる**ことの意味にほかなりません。

ことばの力^{ちから}

(P480・2行/P366・1行)

仏教では、「ことば」というものをひじょうに尊重しています。～(ある行動を起こすときに、「ことば」にして考え行動を起こします)。〈ことばが人間をつくった〉ということもできるわけです。

～我々が心の中に何かを考える時は、必ず「ことば」で考えます。ことば無しには、何も考えることはできません。～妙音菩薩というお方に、なぜ「妙音」という名が付けられたかということ进行深入に考えてみますと、「美しい音声」というのは「真理のことば」という意味でなければならぬことが判ってきます。

※ ことばの力 (『瓔珞品第六』) (第4巻P166・4行/P123・6行)

ことばというものはそれほど大事なもののなものですから、日本では昔から『言霊にどま』という言われ方がされてきました。つまり、ことばそれ自体に生命(いのち)があるように表現したものです。～心こころのなかで思う言葉が「精神」となり、「思想」となり、「信」となって、「自分」を作り、自分を動かします。同様に、声として発する「言葉」は「人をつくり」「人を動かします。人を「生かしも、殺しも」します。

※ 「はじめに言葉ありき」 『新約聖書「ヨハネによる福音書」』

《^{おん}慧のひととき ⑤》

人間は心の中で「ことば」で考え、そしてその考えが「行動」に移すことになる。だからこそ、「ことば」は大切であります。しかも、「妙音菩薩」の「妙音」とは、「真理のことば」だと庭野開祖は説いています。

— 私は日ごろ、「どんなことば」を発しているのでしょうか？ また「真理のことば」をどれだけ発しているのでしょうか？ 振り返ってみましょう。

『華徳、汝但妙音菩薩其の身此に在りとのみ見る。而も是の菩薩は種種の身を現じ

て、處處に諸の衆生の爲に是の經典を説く』 (三五三頁 終行)

華徳よ。あなたは、妙音菩薩はここにいる唯一人(ただひとり)のようにみているでしょうが、そうではありません。この妙音菩薩は、様々な身となってあらゆる所に現われ、衆生の為に法華経を説いているのです。

われわれも妙音菩薩^{みょうおんぼさつ}

(P489・1行/P373・2行)

我々の周囲にも、無数の妙音菩薩がおられるわけです。～いや、我々自身が妙音菩薩の化身であるかもしれないのです。～「真理のことば」をもって法華経の理想を説き人を救うならば、妙音菩薩の化身にまちがいないのです。

※ 『善(よ)く分身散體(ふんじんさんたい)して十方の國土に遍(へん)じ』 (『十功徳品』三〇頁 終五行)

こ　しゃばこくど　あ　もろもろ　しゅじょう　ため　こ　きょうでん　と　じんづう　へんげ　ちえ　おい
『此の娑婆国土に在って 諸の衆生の爲に是の經典を説く。神通・変化・智慧に於
て損減する所なし』　(三五五頁 一行)

この娑婆国土にあって、衆生のために法華經を説いているのですが、その神通変化の力や、
智慧の力がそこなわれたり、減少することは決してないのです。

理想は現実化しても損なわれぬ (P493・1行/P376・5行)

理想を現実化する時は、その結果は必ずと言ってよいほど、理想に劣るすがたとならざるを得ません。現実は、理想どおりにはいかないからです。～だからといって、その理想は少しも変わらず、また理想を求める智慧の力が失われたり、損なわれたりすることはありません。

ですから理想を大事にするあまり、それを汚(けが)すまいとして、ただ夢に描くばかりで現実化する努力をしないのは、じつに無意味なことなのです。

《思惟のひととき ⑥》

現実

現実

理想どおりにはいかないものです。しかし理想を夢に描くだけで、現実化する努力をしないのは、じつに無意味なことなのです。と庭野開祖は説いています。

— このことをあなたはどのように考えますか？　かみ締めてみましょう。

《思惟のふいかえり まとめ》

今日の『妙音菩薩品第二十四』の学びを通して、何を学び取ったか？
(または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) 振り返ってみましょう。

以 上